

「電子音響音楽研究会アジアネットワーク(EMSAN) 研究会」傍聴記

成本理香(名古屋市立大学芸術工学部研究員)

電子音響音楽研究会アジアネットワーク(EMSAN)研究会は、”EMSAN/JSSA DAY 2015 SYMPOSIUM”を”Transmission and Communication in Asian Electroacoustic Music”と題して、岐阜県のサラマンカホールと情報科学芸術大学院大学(IAMAS)主催の「サラマンカホール電子音響音楽祭」の一環として、9月11日同ホールリハーサル室にて開催した。これまでEMSAN研究会は北京中央音楽院を中心に中国、台湾で開催されて来たが、今回は初めての日本での開催となった。

まず始めに先端芸術音楽創作学会(JSSA)を代表して小坂直敏氏からのウェルカムスピーチがあり、続いて、この研究会がサラマンカホール電子音響音楽祭の最初の催しでもあったため、音楽祭主催者を代表してIAMASの三輪眞弘氏の挨拶があった。

発表者は塩野衛子氏、小島有利子氏、マルク・バティエ氏、水野みか子氏、喜多敏博氏、宮木朝子氏の6名で、英語または日本語での発表が行われた。

塩野氏はバティエ氏のピエール・シェフェールに関する著作を中心にとりあげながら、自身の疑問に基づいて「コンクレート」と「アコースモニウム」という言葉がそもそも何を指しているのかという根本的な問いについて考察した結果を発表した。小島有利子氏はこの数年取り組んで来た武満徹の1960年のアンサンブルとテープのための《Water Music》の分析について発表した。ピッチ解析ソフトを使用しつつ詳細に行われた分析結果は、プロジェクターにて未出版の楽譜を映しながら発表され、なかなか目に出来ない楽譜を実際に見ることができる貴重な機会ともなった。バティエ氏は電子音響音楽における異文化の影響、特にアジア文化との融合について、ヤヨイ・ウノ＝エベレットやジョン・コルベットの著作をとりあげながら考察した。この日司会を務めた水野氏は電子音響音楽における「Remoteness(遠隔性)」について、聴衆と演奏者の物理的な距離など5つのカテゴリーに分けて多角的に考察した発表を行った。喜多氏は電子音響音楽の「ライブ・パフォーマンス」における「ライブ感」について問題提起し、発表の後半では実演のデモンストレーションを行った。参加者全員がそれぞれのスマートフォンやラップトップを使って実演に加わったが、これは電子音響音楽における「ライブ感」について一つの可能性を示した。宮木氏は、自作のアコースマティックオペラ《Teleceptor》について、奄美大島でのフィールド・レコーディングからこの作品にいたるまでの過程と作品分析を通して、実践の立場からの発表を行った。

発表者は、研究者、作曲家、演奏家として活動しており、それぞれの視点からの考察と発表はこの分野における研究の多様さを感じさせた。EMSANとJSSAはこのような研究会での発表を録画してYoutube上で公開している。この日の発表もすでに公開されており、誰もがすぐに最新の研究発表に触れられるシステムとなっている(尚、この日の発表のうち小島氏の発表については、武満徹《Water Music》の楽譜の著作権の関係で、プロジェクター部分は録画されていない)。

研究会は用意していたハンドアウトが足りなくなり慌てて増刷するほどで、主催者の予想を超える盛況となった。発表の時間が少々長引いたため、質疑応答の時間が短くなってしまったが、休憩時間や発表後にはあちこちで発表者に質問に行く人が多く、研究会の終了後も活発な雰囲気が続いており、日本で初めて開催されたEMSAN研究会は、充実したものになった。